

第42回 経営協議会 議事要録

日 時 平成24年10月25日（木）13時30分～15時30分

場 所 事務局第二会議室

出席者 畑中裕良 理事、井橋光平 理事、
池田政治 美術学部長、植田克己 音楽学部長、堀越謙三 大学院映像研究科長、
石田義雄 委員、中村胤夫 委員、福井俊彦 委員、高階秀爾 委員、
滝 久雄 委員

陪 席 監事：中島尚正 監事、金井 満 監事
渡邊健二 理事、北郷 悟 理事、宮廻正明 学長特命・社会連携センター長、
多田羅迪夫 学長特命・演奏芸術センター長、大角欣矢 附属図書館長、
三田村有純 学長特別補佐

欠席者 宮田亮平 学長、遠山敦子 委員
関 出 大学美術館長

○ 議事に先立ち、渡邊理事から、宮田学長に代わって議長を務める旨の発言があり、了解された。

議題

1. 東京芸術大学基金規則等の制定について（案）
議長代理から標記のことについて提案があり、畑中理事から資料に基づき説明があり審議の結果、原案どおり承認された。
2. その他
特になし

報告及び連絡事項

1. 平成23事業年度財務諸表の承認について
標記のことについて、畑中理事から資料に基づき報告があった。
2. 平成25年度概算要求について
標記のことについて、畑中理事から資料に基づき報告があった。
3. 決算検査報告に掲記した事項に対する処置状況について
標記のことについて、畑中理事から資料に基づき報告があった。

4. 実地検査の結果について
標記のことについて、畑中理事から資料に基づき報告があった。
5. 東京芸術大学学生寮整備運営事業契約について
標記のことについて、議長代理から報告があった。
6. 人事院勧告及び退職手当の支給水準引下げ等について
標記のことについて、畑中理事から資料に基づき報告があった。
7. その他（昨今の本学をめぐる諸情勢について）
 - 三田村学長特別補佐から、「創立125周年記念事業 藝大アーツ・サミット2012 アジアから世界へー連携と共生ー」について報告があった。
 - 畑中理事から、「大学改革実行プラン」について報告があった。
 - 議長代理から、文化審議会文化政策部会の会長である本学学長から文化庁長官へ「最近の情勢と今後の文化政策～東日本大震災から学ぶ、文化力による地域と日本の再生～」とした提言を行った旨の報告があった。

その他：（ご助言、ご提言等）

学外委員からの主な意見

- グローバルな人材の育成には、若い人が他の国の自然風土に触れることが大切である。学生の留学に関し、双方向での傾向や単位互換など制度上の問題はどうか。
 - ・ 受入は安定している。出かける方もそれほど減っている実感はないが、ポローニヤ宣言以降、ヨーロッパでの単位の共通化などに伴い、語学のハードルが少し高くなる等の制限上の問題から、少しやりにくくなっている部分もある。
 - ・ 単位互換は、多くの大学等がそうであるように読み替えて、臨機応変にやっている。
 - ・ 美術は、出かける方も協定校を中心に定着している。
 - ・ 音楽も、協定校との定期的なものはないが、適時対応を図っている。
 - ・ 世でいわれるように、出かける方の熱意は、以前と変わってきていると思われるが、日本を出ない理由には、実技教育において教えを請いたい先生方が多忙なため、定期的な教えが受けられないなど、様々な要因がある。
 - ・ 本学は実技重視の特色を持つが、単位だけの大学もあり、この場合、人気の先生の下ではなかなか教えが受けられず、単位不足で1年間棒に振るような例もある。よって制度上の問題や本学の教育体制を今後も吟味しなくてはならないが、外へ出て自身の力を試したいという希望者は、以前より増えている。
- 大学実行改革プランの中で、それが目的というより、どういう学生、芸術家を生み出していくかというプロセスの一部としてグローバル化を考えることが大切ではないか。
 - ・ グローバル化については、本学も制度上の様々な問題などをフレキシブルに考えていきたい。
- 今の時代の大学改革とは、独創性のある人材を育てることであり、その意味で藝大は、トップでなくてはならない。藝大こそ見本だというコンセプトで大学改革実行プランを考えてもらいたい。

- グローバル化といっても、共通の言葉は必要だが、無理に英語を使う必要はない。芸術文化におては言葉を限定すべきでない。
- 日本に勉強しに来る外国人留学生に対しては、文化の基礎となる言葉について、あまり甘くする必要はない。
- 藝大は、学科試験のあり方について、思い切った考え方をしても良いのではないか。
 - ・ 受験者に対しては、センター試験を課して入学者選抜を行っている。
- 地方の町作りは、文化芸術の視点が欠けている。日本の良い文化を継承した町作りに、藝大が地方大学との壁を取り除き、連携してやってもらいたい。
 - ・ 地方自治体とは連携事業を行っているが、地方大学との連携は行っていない。以前、地方の国立大学からオファーがあったが、学生の移動等の問題から断ち切れとなった。
- 戦後の日本は、芸術文化に対する評価が低いので、藝大が中心となって、そういった意識構造を変えてもらいたい。国には、文化芸術を国家戦略としてとらえ、芸術と文化には他と比することなく税金が使用できるように考えてもらいたい。

- 三田村学長特別補佐から、外部委員の机上資料について説明があった。